

特別展示
山内逸三と藤井厚二
－聴竹居で育まれたものたち－



マジョリカタイル（1931年頃、山内逸三） 撮影：小寺克彦

会期 : 2025年10月4日（土）～2026年2月1日（日）
会場 : 多治見市モザイクタイルミュージアム3Fギャラリー
休館日 : 月曜日（休日の場合は翌平日）、2025年12月28日～2026年1月3日
開館時間 : 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分）
観覧料 : 一般500円、団体400円（特別展示料金）
高校生以下無料、障がい者手帳をお持ちの方及び付き添い1名様無料
主催 : 多治見市モザイクタイルミュージアム
協力 : 株式会社竹中工務店、一般社団法人聴竹居倶楽部 ほか
監修 : 加藤郁美

タイル
藤焼
聴竹居

【展示概要】

当館が所在する多治見市笠原町がタイルの町へ変わるきっかけをつくった人物に山内逸三がいます。山内は窯業学校を卒業後、1923年頃から京都の地で窯業・絵画・英語を学び、1929年に帰郷。その後6年の時を経て施釉磁器モザイクタイルを開発し、その量産体制を確立させました。

そんな山内に多大な影響を及ぼした京都時代を語る上で欠かせない人物が建築家、藤井厚二です。藤井は1928年、木造モダニズム建築の傑作にして2017年に重要文化財指定を受けた平屋住宅、「聴竹居（ちょうちくきょ）」を自ら所有する大山崎町の土地に建て、家族と共に居住しました。この藤井の元に、当時の山内が出入りしていたのです。家具や照明など、建築を彩るあらゆるものをデザインした藤井は陶磁器にも並々ならぬ関心を注ぎ、敷地内に窯を築いて「藤焼」と称するやきものを制作しました。

本展では、当時の京都で建築陶材の研究や陶磁彫刻の工芸化を牽引した国立陶磁器試験所の存在を背後に見据えながら、山内逸三が戦前に制作した美術タイル、そして本邦初となる、藤焼の中でもとりわけ特徴的な動物の陶磁彫刻を一挙、公開します。



聴竹居 本屋 撮影：古川泰造



うずら（1938年以前、藤井厚二）

特別展示開催記念対談「松隈章×藤森照信」

本展の開催を記念して、一般社団法人聴竹居倶楽部、代表理事である松隈章氏、そして当館名誉館長の藤森照信氏にお越しいただきます。

- ・日時：2025年10月4日（土）13：30～15：30（予定）
- ・会場：多治見市笠原交流センター公民館 大ホール（B1F）
- ・詳細、応募方法等：9月頃公開予定



【プロフィール】

松隈 章（まつくま あきら）

1957年生まれ。株式会社 竹中工務店 設計本部 設計企画部 部長付及び経営企画室サステナビリティ推進部兼務。一般社団法人 聴竹居倶楽部 代表理事。公益財団法人 竹中大工道具館評議員。一般社団法人 住宅遺産トラスト幹事。1980年北海道大学建築工学科卒業後、竹中工務店入社。設計業務の傍ら近代建築の保存活用や数多くの建築展に携わる。主な著書『聴竹居 日本人の理想の住まい』平凡社、『聴竹居 発見と再生の22年』びあ関西、『聴竹居実測図集』彰国社。聴竹居の一連の活動に対して2018年度日本建築学会賞業績賞及び日本イコモス賞を受賞。保存・修復・再生に関わった「旧ジェームス邸」が建築学会作品選集とBELCA賞受賞。

【プロフィール】

藤森照信（ふじもり てるのぶ）

1946年長野県生まれ。建築史家、建築家。東京都江戸東京博物館館長。東京大学名誉教授。工学院大学特任教授。86年、赤瀬川原平や南伸坊らと「路上観察学会」を発足。91年〈神長官守矢史料館〉で建築家としてデビュー。97年〈ニラ・ハウス〉で日本芸術大賞、2001年〈熊本県立農業大学校学生寮〉で日本建築学会賞、2020年〈近江八幡ラ・コリーナ草屋根〉で日本芸術院賞を受賞。著書に『明治の東京計画』（岩波書店 毎日出版文化賞）、『日本の近代建築 上・下』（岩波新書）、『建築探偵の冒険・東京編』（ちくま文庫 サントリー学芸賞）、『人類と建築の歴史』（ちくまプリマー新書）、『茶室学講義—日本の極小空間の謎』（角川ソフィア文庫）、『藤森照信作品集』（TOTO出版）などがある。2009年円空賞受賞。2020年清流の国ぎふ芸術祭審査員。

